



神戸アドベンチスト病院
婦人科周産期部長

原田佳世子(はらだ・かよこ)先生

兵庫医科大学卒業。病院での臨床経験を経て同大学大学院修了(医学博士)。同大学講師を務めた後、2020年から現職。「生理以外の不正出血には、多くの場合、何か疾患が隠れています。特に子宮体がんは、不正出血が唯一といっていいサインです。生理と紛らわしい場合も放置せず受診してください」

女性の、クリニック

第 65 回

子宮体がん

子宮の病気はいろいろで、年齢とともに変わります。

高齢になってくるとリスクが増すのが

子宮体がん。早期発見で、しっかり治療しましょう。

取材・文／杉野佐恵子 撮影／外賀嘉起 イラスト／清水みどり



子宮がんには原因の異なる子宮体がん
と子宮頸がんがあり、日本国内では年間の
発症者数が子宮体がん1万8000人、
子宮頸がん1万人、死亡者数が子宮体がん
2500人・子宮頸がん3000人ほ
どに上り、ともに増加傾向にあります。
子宮体がんが増えているのは、食生活
の欧米化に伴って肥満が増えていること
や、少子化によって女性ホルモン(エス
トロゲン)の刺激を子宮内膜が長く受け
ることが影響しています。一方、子宮頸
がんが増えているのは、初交年齢が早い
ことや健診を受ける人が少ないことなど
が原因と考えられています。

子宮がんは、
増えているの？

「生理の周期が短くなったり、ついに閉経かと思ったら、
ひと月ほど続くのですが…。病院へ行く方がいいですか？」

子宮がんって、どんな病気？
体がんと頸がんは
どう違うの？

子宮がんは、子宮にできるがんの総称
です。このうち、子宮頸部と呼ばれる子
宮の入口部分にできるのが子宮頸がん、
子宮体部と呼ばれる子宮の奥の部分にで
きるのが子宮体がんです。この2つは、
できる場所だけでなく、原因も発症年齢
も異なります。

子宮頸がんが性交渉によって感染する
ヒトパピローマウイルスが主な原因とな
るのに対し、子宮体がんはエストロゲン
による長期的な刺激が主な原因となりま
す。発症年齢は、子宮頸がんが20代後半
から増えてきて30～40代がピーク、子宮
体がんは40代後半から増えてきて50～6
0代がピークとなります。

子宮体がんの原因については、エスト
ロゲンが影響している場合が約8割を占
めますが、DNAの修復に働く遺伝子に
変異があるリンチ症候群が原因で発症す
る場合や、比較的高齢者に多い明細胞が
んなど、エストロゲンは全く関係がない
ケースも見られます。リンチ症候群では
家族内において、大腸がん、子宮体がん、
腎盂・尿管がん、小腸がん、胃がんを発
症する方が多くなります。リンチ症候群
が原因の場合は20～30代で発症すること

●子宮頸がんと子宮体がんの特徴

	子宮頸がん	子宮体がん
発生部位	子宮の入口の子 宮頸部	胎児を育てる子 宮体部の内側に ある子宮内膜
発症年齢	20代後半から多 くなり、30代後半～4 0代で最も多くなる	40代から多くな り、50～60代で 最も多くなる
主な 発生原因	ヒトパピローマウ イルス(HPV)の感染	エストロゲン(女 性ホルモン)によ る長期的な刺激

もあるので、ご家族の病歴などから見て
疑わしい場合などは、ぜひ早めに、カウ
ンセリングや検査が行える医療機関を受
診してください。

気になる子宮体がん。
どんなふうで発症して
どんな症状が出るの？

女性ホルモンのエストロゲンは、月経
から排卵までの間に分泌が高まり、子宮
の内膜を分厚くします。プロゲステロン
は排卵から次の月経までの間に分泌が高
まり、分厚くなった内膜をやわらかく保
って妊娠しやすい状態をつくります。ど
ちらのホルモンの分泌も妊娠すれば大幅
に高まりますが、出産直後に急激に減少

し、授乳中も低い状態が続きます。

こうした女性ホルモンの分泌の周期やバランスが何らかの原因で崩れてエストロゲンの作用が強く出続けると内膜が増殖し、内膜増殖症という病変が起こります。それがさらに異型内膜増殖症という疾患になってくると、それは子宮体がんの前がん病変になります。ですから、エストロゲンが過剰に働く状態が、子宮体がんのリスク因子となります。たとえば肥満の方であれば、脂肪からもエストロゲンが生産されて内膜が増殖し、子宮体がんへと進んでしまうことがあります。また、少子化晩婚化で妊娠出産によって内膜の増殖が抑えられる期間が短くなったりなくなったりすることも、子宮体がんの発症リスクを高めます。

子宮体がんは、発症しても初期には症状がほとんどありません。唯一発見のきっかけとなるのが、不正出血と呼ばれる生理ではないのに起こる出血です。進行してくると、おなかの痛みや張りなどが出てくることもあります。

どんな人が、
子宮体がんになりやすいの？

前述のとおり、肥満は1つのリスク因子です。長時間座って過ごす人は子宮体

がんになりやすい、BMIが5増えるごとに子宮体がんのリスクが1・5倍になるなどの研究結果もあります。

このほか、排卵が起こりにくくなる多嚢胞性卵巣症候群（PCOS）の患者さんもプロゲステロンが出にくく、エストロゲンが過剰になって子宮体がんになりやすくなるため注意が必要です。また、タモキシフェンという乳がんの再発予防薬でも子宮体がんのリスクが高まります。更年期障害のホルモン補充療法については、かつてはエストロゲン単独で行っていたため子宮体がんのリスクが高まっていたようですが、今はプロゲステロンも併用するのが標準となり心配はなくなりしました。ご自分の判断で女性ホルモンのサプリメントを長期使用される場合などは、エストロゲンが過剰にならないよう十分に注意してください。

どんな検査や
治療をするの？

不正出血で受診された場合、一般的には子宮頸がん検査と超音波検査を行い、超音波検査で内膜が分厚く、その内部の血流が豊富であれば、子宮体がんを疑います。悪性かどうかの確定のためには、細い棒状の器具を子宮の奥まで入れて行

う子宮内膜細胞診、内膜組織診検査が必要となります。

診断が確定すれば、MRIやCTによる画像検査で、がんが子宮の中にとどまっているのか、リンパ節や肺などへの転移はないかなど、がんがI期からIV期までのどのステージにあるかを詳しく調べます。

その結果、多くの場合は子宮摘出の手術を行い、ステージによって手術時にリンパ節を取り除くなどの対応をとります。その後、再発が心配される場合は予防のための抗がん剤治療を追加します。手術を行った場合、5年生存率はI期95%、II期75%と予後は良好です。入院期間は腹腔鏡手術が開腹手術かで多少違いはありますが、だいたい1〜2週間。2〜3週間は傷の痛みが残るかもしれませんが、徐々にふだんの日常生活に戻れるでしょう。ごく初期であれば妊娠を希望される場合は、子宮を取らずにプロゲステロン治療を試みることもあります。

ふだんから
気をつけておくことは？

太り過ぎに気をつけてください。じっと座っている時間はできるだけ減らし、運動を心がけましょう。

そして何よりも、不正出血を見逃さないこと。特に閉経が近づくなどして月経周期が不規則になってくると、生理と不正出血の区別がつきにくくなり、要注意です。おかしいなと感じたら、用心しすぎるぐらいの気持ちで受診してください。定期健診においては、子宮頸がんの検査はあっても子宮体がんの検査はないのが普通ですが、頸がんとのセットで超音波検査のオプションが用意されていることがあります。超音波検査は痛みなどは全くない検査なので、その場合は積極的に受けられることをおすすめします。

「年齢的には子宮体がんの可能性もあります。
早期発見のためにも、受診しましょう！」



次号は引き続き、「更年期」について先生にお話を伺います。